

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

イタリアそろばんの旅①

* ナポリへ ① *

木下 和真

「イタリアの博物館」と「そろばん」と聞いても、繋がりなど何もないように思うかもしれないが、そんなことはない。イタリアの博物館でもそろばん(abacus)に出会うことができるのだ。

まず一つ目はローマ・マッシモ宮博物館所蔵のローマ算盤。ローマ時代のもので、日本のそろばんとよく似ている。二つ目もローマで、エピトリーニ博物館所蔵のレリーフ。レリーフの隅には男がそろばんを持ち計算をしている。三つ目はナポリ考古学博物館所蔵のダレイオスの壺。壺の表面にそろばん(abacus)を使い計算する男が描かれている。どれもが約二千年前のもの。イタリアという国の長い歴史を改めて知ると同時に、見ずして帰国するわけにはいかないという思いが募る。

帰国便はローマ発。最初の二つを見るチャンスはある。あとはナポリだ。何とかしてナポリに行かねばと思っていると、ちょうど連休があった。イタリア滞在もあと十日足らず、利用しない手はない。私はナポリ行を心に決めた。

早速、コラードさんにこのことを伝えると、返事は直ぐに返ってきた。

「壺だけを見にナポリに行くのですか？ イタリアにはもっと他に見るべき物があります」

あっけなく反対されてしまった。一般的に考えるとコラードさんの返事のもっともかもしれないが、ここで引き下がるわけにはいかない。

「北イタリアしか知らないの、南イタリアを見てみたいのです。ポンペイとか、カプリ島とか…」私は知っている南イタリアの観光地を挙げてみる。

「壺だけではないのですかね？」

「はい、壺だけではありません。」

私はお腹に力を込めて答える。

「それなら、ポンペイよりは、エルコラーノがいいでしょう。初めての南イタリアならカプリ島もいいでしょう」

壺だけではないことを知り、やっとコラードさんの許可が下りた。

早速、インターネットでホテルを予約。夜行列車でナポリに行き、一泊。翌日は南イタリアを観光。また夜行で帰ってくるという、少々強行軍の日程だが、私のナポリ行きが決定した。

夜行列車内は、座席は固く、どういうわけか私以外コンパートメント内はすべてインド人。「忍」「耐」という言葉でしか表しようのない夜が明け、ナポリの駅にたどり着いた。

ここはヨーロッパなのだろうか……町に一歩出た瞬間から、今までに経験したことのない独特の雰囲気圧迫される。

まずは駅のカフェに戻り朝食を済ますことにした。コラードさんから聞いていたヘーゼルナッツコーヒー caffè alla nocciola とピザで空腹を満たし、気合を入れ直し、街へ繰り出した。ナポリの街に信号はあってないのと同然とは聞いていたが、これほどとは。人も車もすべてがごったがえしている。何が起こるかかわからない不安を抱えながら、とりあえずホテルに向かう。安宿なので路地の奥にある。

出発前に聞かされていた話は、警告じみたものばかりだった。

ナポリと言えば、マフィア。街を歩いていると、前から来た男に金のネックレスを無理矢理引きちぎって奪い取られたなど……

海外旅行には慣れているはずの私ですら、路地に入ることに勇気がある。旅行者丸出しを避けるため、できるだけガイドブックの地図を見ないように歩く。喧騒の中何とかホテルにたどり着いた。ホテルに入るとフロントの壁に日本語が書かれている。ガイドブックに乗っているだけあって、日本人旅行者も少なくないようだ。

さっそくインターネットで予約した旨を伝える。前もって予約しているにもかかわらず、おじさんはまったくの無愛想。ただ、

「Il passaporto.」

と告げられる。その瞬間

「しまった！」と思った。パスポートを忘れてしまった。宿のセーフティーボックスに保管したままだ。

アドバイスがすべて「余計なものは持っていくな」「現金は最小限」だった。「すりがある」挙句の果てには「マフィアがいる」忠告を守り、荷物を極力少なくしようとしたのが仇となった。国内旅行だからという思い込みもあった。

「パスポートを忘れた。けれど予約をしたので泊めてほしい」

なんとかなるだろうという甘い気持ちでフロントのおじさんに告げる。しかし、愛想のかけらもなく邪険に言い放たれた言葉は、「パスポートがないなら泊めることはできない」だった。

なんとか身分を証明するものはないだろうかと探してみたがまるでない。大事なものはすべてヴェローナの金庫の中。おじさんの無愛想度合にも腹が立ってくる。そして、私は「ならいい。他を探す」と言い放ち、ホテルを出ることにした。

威勢よく飛び出したものの当てはない。どうする。自問自答する。とにかく、手あたり次第ぶつかるとしかない。パスポートも持っていないが、余計な荷物も持っていない。動きまわるには好都合だ。とりあえず駅前のホテルにあたろう。また駅に向かって戻っていった。

この期に及んでホテル代どうこう言われてられな

い。目につくホテルに飛び込む。

「パスポートを忘れたのですが、泊まることはできますか？クレジットカードならあるのですが？」

駅前のホテルなので、受け答えは丁寧だが返事は変わらない。

「パスポートがない。なら無理だ」

ここですごく立ち去るわけにはいかない。

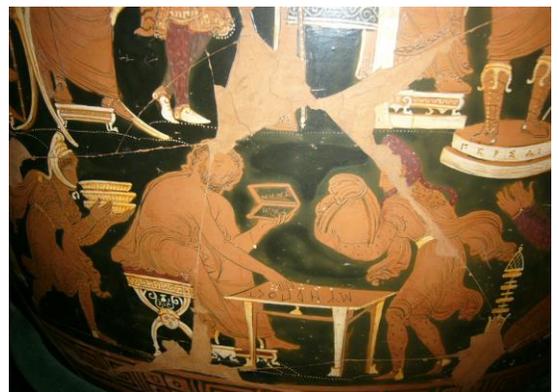
「どこかパスポートなしで泊めてくれる宿はありませんか？お金ならあるのですが」

「お金の問題じゃない。パスポートを持ってないと泊めれないよ。コピーもないの？」

悲しいかなコピーすらない。その後、目につくホテルはすべてあたってみたがどこも同じ返事だった。

もうどうしようもない。私は気持ちを切り替えナポリの街へ繰り出した。一日は長い。とにかく博物館へ行くことにした。これこそが本来の目的である。

ナポリ考古学博物館に着くと、まずその大きさに圧倒される。中に入ると二千年前の彫刻が所狭しと並んでいる。その数と大きさ、迫力たるや、見た者にしかわかりえないだろう。展示品からにじみ出る古代ローマ人の力強さ、息遣いを感じながら、古代ギリシア、アッティカの壺の展示に向かうと目的の品はすぐに見つかった。紀元前300年頃の壺で、ペルシアの大王ダレイオスが中央に描かれている。その下には、当時の計算盤を使い貢物の計算をしている絵が描かれている。広い意味でこれもそろばん(abacus)と呼ばれるものだ。紀元前の昔に遡るそろばんを見るのは感慨深いものだった。



【ダレイオスの壺に描かれた abacus】

こうなるともっと知りたくなる。いくつかの疑問を学芸員にぶつくと、隣の建物に図書館があるという。結局、私は閉館まで壺に関する資料と格闘し続けた。

図書館の外に出ると一瞬にして二千年後の現実に戻される。差し迫った問題は今晚どう過ごすかだ。仕方ない、夜行列車でヴェローナに帰ろう。そう決めるとナポリの路地を楽しむ余裕も生まれた。スパッカナポリと呼ばれるナポリの下町を歩く。朝から何も食べていないためレストランに入りトマトスパゲッティを注文する。食べている瞬間は余計なことを考えなくていい。イタリアに来て一番おいしいと感じたのがこのナポリのレストランだった。



【スパッカナポリ】

日も西に傾く頃、ナポリ駅に戻ってきた。明日はここからカプリ島に向かうはずだった。カプリ島と言えば青の洞窟。定番ではあるがやはり押さえておきたい。ここ数日は天気も良好だし、さぞかし綺麗なところだろう。

けれど仕方ない。ヴェローナに帰るべく、切符売り場に足を向ける。いつもは自動販売機で切符を買っていたが、キャンセル、変更の場合は直接駅員とやりとりする必要がある。しかし、そこには長蛇の列。連休だけのことはある。ゆうに二十分は並んだらうか、やっとのことで自分の番が回ってきた。

「明日のヴェローナ行きを、今晚の便に変えてほしいのだけど」

返事は一言。

「今日は無い」

「えっ、無いの?!……じゃあ……」

さらに一言。

「次」

私は列の外にはじき出され、ただ立ち尽くすしかなかった。

(当館語学受講生)

～イタリア文化セミナーご案内～

宮嶋勲先生<出版記念講演>

フルコースランチ付セミナー

「10皿でわかるイタリア料理」

日本人を虜にしたイタリア料理の魅力はいったいどこにあるのでしょうか？今回のセミナーではイタリアの文化、歴史が詰まった基本料理を宮嶋先生と一緒に味わいながら、そのルーツを辿ります。

<京都>

日時:10月6日(日)11時～12時 セミナー

12時～13時30分 フルコースランチ

場所:ボッカ・デル・ヴィーノ (BOCCA del VINO)

京都市中京区室町通四条上ル菊水鉾町 569

地下鉄四条駅または阪急烏丸駅から徒歩3分

<大阪>

日時:10月27日(日)11時～12時 セミナー

12時～13時30分 フルコースランチ

場所:ベアート *詳細は6ページをご覧ください

参加費:会員 6,000円、受講生・一般 7,000円

(食事代、ワイン代(赤白各一杯)、著書代含)

詳細は事務局までお問合せ下さい

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax: (06) 4743.212
E-mail: comeva@nipponclub.it
URL: www.nipponclub.it

イタリア通信

第14回『ドン・ガッロ

—異なる世界のあり方を探し歩いて—』

深草 真由子

ここ数ヶ月の間に、二十世紀の生き証人と呼ぶことのできるイタリア人が相次いで他界した。三度も首相を務めたジュリオ・アンドレオッティ、ユダヤ人であるために公職を追われた過去をもつ、ノーベル医学生理学賞受賞者のリータ・レーヴィ・モンタルチーニ、社会運動にも尽力した女優フランカ・ラーメと天体物理学者マルゲリータ・アック、マフィアに殺害された判事の妻で、マフィアと政治家の癒着を追及し続けたアニーゼ・ボルセッリーノ。五月二十二日にはジェノヴァでドン・アンドレア・ガッロが亡くなった。写真を見れば分かる通り、聖職者の一般的なイメージとは若干異なっているかもしれないが、葉巻と黒い帽子がトレードマークの彼は陽気でシニカルで親しみやすい、皆のおじいさんのような存在だった。



【ドン・アンドレア・ガッロ】

「今この社会で最も犯されている罪は一体何か、答えに困るよ。私に言わせれば、私たちは七つの大罪をミックスして、八つ目の罪を作ってしまった。憤怒、羨望、高慢、怠惰、貪食、邪淫、貪欲以上に、世の中には無関心が蔓延している。それはすべての罪の中でも最悪の罪だ。人の苦しみを見て見ないふりをするのが罪であるなら、態度を明らかにしないのも罪、なんとかしようと思わず、行

動しないのも罪、特権や獲得した安定という防護の後ろに身を隠すのも罪。私は若いころから苦悩を経験として知っており、苦悩を克服する唯一の方法は、それを他人と共有することだと学んだのだ」。

ドン・ガッロは自らを Prete da marciapiedi と称している。彼はジェノヴァの下町の路地裏に生きる薬物依存者や売春婦、移民、トランスセクシュアルなど社会から疎外された人々に手を差し伸べる聖職者であった。Comunità di San Benedetto al Porto という施設を設立し、その扉をノックする者たちを温かく受け入れ、話を聞き、彼らが社会復帰するために手を貸してきた。ダンサーになるためにブラジルからやってきたトランスセクシュアルのステッラ。夢叶わず、トラブルから不当にも刑務所行きになったが、男とも女とも認められず行き場のなかったステッラを迎え入れたのもドン・ガッロだった。スイスやフランスで銀行強盗を犯した後、故郷のジェノヴァに戻ってきたヴィットーリオ。エイズに感染していることを告白した彼を世話し、その最期を看取ったのもドン・ガッロ。男に騙されている事実に気づこうとしない娼婦のミレーナについては、孤児院にいる彼女の息子を探し出して再会させ、新たな人生を歩むように後押ししたのもドン・ガッロ。彼は社会の底辺で生きる人々を何の偏見もなく受け入れ、具体的な支援をしながら、彼らとの出会い、彼らの生きざまから、生きることの本当の意味を学んできたと言う。

ドン・ガッロの人柄を形容するさまざまな表現の中で、もっともふさわしいものは *Angelicamente anarchico* かもしれない。ドン・ガッロは規則や慣習にとらわれることなく、自由を愛し、自由を守るために公然と闘った。

ドン・ガッロは十六歳のとき、レジスタンス運動に参加した経験がある。十五歳でジェノヴァの海軍学校に入り、ファシズムに対してとりわけ大きな疑問を抱くことのでなかった彼にレジスタンスの意義を教えたのは、後にパルチザンの指揮官となる兄だった。ファシストらと共にサロに行くか、命の危険を冒して逃亡するか。ドン・ガッロはレジスタンス側に転向し、パルチザン部隊の伝令となる。体制に従順で、批判的精神を欠く人間を育てるファシズムというシステム。その偽りの価値観から

解き放たれた時の「目覚め」と、民主主義と平和を勝ち取った時の達成感は、当時まだ若かったガッロのその後の人生の歩みに大きな影響を与えたに違いない。

1965年、ドン・ガッロはジェノヴァの下町、港湾労働者が多く暮らすカルミネ教区の主任司祭代理になる。ちょうど第二ヴァチカン公会議が終わろうとしていた頃である。アメリカでは平和を希求する市民たちがベトナム反戦デモに立ち上がり、パリでは五月革命と呼ばれる大学生や労働者による反体制運動と、その成果として政府の政策転換があった。その影響は大きく広がり、世界各地で市民たちが政治を動かそうとしていた時代である。ドン・ガッロは自分の教区に暮らす市民たち、資本主義のひずみによって苦しむ労働者たちに寄り添い、ミサでは福音書とともに時事ニュースを読み、政治や社会の問題について信者らと議論していた。しかしそんな彼の言動に、保守的なローマ教皇庁は目を光らせていた。1970年、教皇庁はスパイを使ってドン・ガッロの説法を録音し、「ミサで政治活動をしている」「共産主義者である」という理由で彼の左遷を決定したのであった。ところが、ドン・ガッロを信頼する信者や近隣の住民たちが、教皇庁の決定に抗議するデモをジェノヴァの町中で繰り広げたのだ。体制から弾かれた自分のために数千もの人々が連帯の意を示したその日の出来事は、ドン・ガッロの人生にとって決定的だったのではないだろうか。聖職者として、市民として、周りにいる多くの人々との関わりの中に自分が存在していることを強く意識するようになった瞬間だったのではないか。



【左遷をうけて、当時ある少年が泣きながら口にした言葉
“Mi hanno rubato il prete!”】

「出会いとは名刺交換みたいなもの。イエスから私が受け取った名刺には『奉仕されるためではなく、奉仕するために私はやって来た』と書いてあった。イエスに倣い、私も奉仕が必要とされる所に行くんだ。ポリスや町において教会は奉仕、それも他者への奉仕の役目を担うべきで、他者を下から支え、喜んで批判に耳を傾け、腕を広げてあらゆる人々を受け入れるべきだろう。教会は本物のヒューマニズムの砦であり、不断の対話の場、異文化がぶつかりあう場であるべきなのだ。ちょうどイエスが『私は奉仕するためにやって来た』と言ったように。なのに、カトリック教会は信仰と政治を混同しながら、自分たちのことを、自分たちの利益のために、自分たちだけで考えている」。ドン・ガッロは教会の気に食わないところとして、ピラミッド型のヒエラルキー、戦争に断固として反対しないこと、清貧の道を選択しなかったことの三点を挙げている。ドン・ガッロは自分の属する組織の主義主張にとらわれず、いつも自由に思考し、しかも批判を怖れず自分の意見を表現する強さも備えていた。たとえば聖職者の独身制については反対。結婚できるようにすれば、買春したり子どもに性的虐待したりする聖職者の問題は減るだろうとしている。教会にとって罪である同性愛は、ドン・ガッロにとっては神の恩恵。女性の叙階に賛成、離婚に賛成、安楽死は規定に従って行われるのであれば賛成。ソフトドラッグについては合法化に向けて新たな規制を作るべきとし、薬物使用者への偏見と薬物にあこがれる若者の増加を助長している禁止論には与しない。

ドン・ガッロは行動する人だった。「道徳的な理由のためにデモの列に加わるのは、宗教行列をするのと同じ。広場の集会に加わる司祭はまだまだ少ない。本来ならもっと多くの者が行く必要があるのに。参加はわれわれの職務のひとつなのだから。…聖職者の使命は新たな天と地を予告することだ。平和と正義を守るために司祭が行動しなくてどうする？」ドン・ガッロはヴィチエンツァのアメリカ軍基地建設反対運動にかかわり、仲間とともに予定地の土地を購入したり、積極的にデモに参加したりした。また2001年にジェノヴァで開催された主要八カ国首脳会議の折には、ブッシュ元大統領らが提唱する新自由主義的な世界のあり方に反対し、新たな形のグローバリゼーション

を模索する若者たちと行動を共にした。そのとき、警備中のカラビニエーレの発砲した弾に当たって倒れ、パトカーでひき殺されたデモ隊の一人、二十三歳のカルロ・ジュリアーニのことにドン・ガッロは何度も言及し、その殺人事件の真相究明を訴えつけた。

清貧の理想を掲げたアッシジの聖フランチェスコのようなローマ教皇が貧しい人々のための貧しい教会を導いてゆくことを、ドン・ガッロは強く望んでいた。三月に新たに選出されたアルゼンチン出身の教皇フランシスコは好感度も高く、今のところ改革路線を進んでいるように見えるが、ドン・ガッロが生きていたらどんなことを言うだろう。弱者救済の功績はもちろん、言論の自由を守るために身体を張り、本物の民主主義を追及した勇氣ある行動ゆえに、信仰の有無に関わらず、イタリア人がドン・ガッロに負うところは多いと思う。



【カルミネ教会で行われた告別式の様子。
最後の挨拶をしにきた人々で町はあふれた】

[参考文献]

Don Andrea Gallo, *Angelicamente anarchico*, Mondadori, 2005; Don Andrea Gallo e Loris Mazzetti, *Sono venuto per servire*, Aliberti editore, 2011.

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>

イタリアンレストラン紹介 ～谷町4丁目～

トラットリア&ピッツェリア

ベアート

専用の石窯で焼き上げるナポリピッツァをはじめ、伝統的なイタリア料理を定番として毎日市場で吟味した旬の食材をその日のお勧め料理として1年を通じて楽しんで頂けます。

毎年イタリア人留学生をアルバイトとして受け入れている他、イタリア食材インポート会社と協力し日本にまだあまり馴染みのない食材を紹介するイベント等、積極的に文化交流を行っております。

特典: (日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
食後酒サービス(ディナータイムのみ)

住所: 大阪市中央区鑪屋町1丁目4-2
電話: 06-6943-6090

